

## 論文審査の要旨及び担当者

### 論文題名

発達障害における関係論的な自己発達と支援の可能性—知的障害を中心に—

### 論文審査の要旨

本研究は関係論という視点から発達障害、特に知的障害における自己発達とその心理臨床的支援の可能性について論じたものであり、文献研究編と事例研究編で構成されている。

I「はじめに」では、著者の問題意識が論じられている。知的障害を中心とした重い発達障害をもつ人々への心理臨床的支援は、先行研究が極めて少ない。そのため、著者が彼らと文字どおり手探りで関わり、研究として発表するというくり返しのなかで探索的に進め、深められてきた経緯が語られる。15年間におよび支援のなかで、彼らの豊かできっけりとした変容に立ち会った自身の体験を掘り下げながら、著者は発達障害とはそもそも何なのか、彼らの変容とはどういうもので、それは何によってもたらされるのか、ということのみずからに問う。それを明らかにすべく、本研究では、発達障害とは何かを問い直し、彼らの変容を自己発達と捉えてその特徴を検討し、彼らの自己発達支援のあり方を検討する、という構成が表明される。ここで著者の問いは、以下の3つのリサーチ・クエスチョンとして集約され、提示されている。

リサーチ・クエスチョン1：発達障害とはそもそも何であるのか。

リサーチ・クエスチョン2：発達障害における自己発達とはどのようなものか。

リサーチ・クエスチョン3：発達障害における自己発達支援はどのように行うか。

これらに答えるために、II「文献研究編」では、第1部で発達障害概念について、第2部では本論文の基本的視座である関係論について論じられている。

第1部第1章では、当該概念の学際性を踏まえ、医学や社会学など周辺領域にまたがる論考をもとに、発達障害概念が成立して日本に導入された歴史的展開を見渡している。第2章では、発達障害概念の中心的な機能障害である知的障害が、わが国において発達障害概念から分断されていった経緯が示され、その上で、「発達障害とは、知的障害をはじめとする発達早期に明らかとなる精神神経発達の機能障害をもつとされる本人と、周囲の他者やセラピストとの関係性において立ち現われる相対的な構成概念である」という視点が提示される。これが、リサーチ・クエスチョン1への答えである。

第2部第1章では、精神分析の流れを軸に、関係論が臨床心理学における主要なグランドセオリーとして浮かび上がってきた経緯を示し、第2章では、関係論における基礎概念について整理している。関係論という枠組みにおいて、「自己」とはアクチュアルな相互作用としての「関係性」における不可欠な構成要素であり、人が関係性を生きる確かさの根拠が「自己」で

あるとしている。このような認識に立つと、発達障害のある人の変容は、彼らと周囲の人々とのアクチュアルな関係性において展開し、その関係性を踏まえて互いが暫定的にとりむすぶ自己というまとまりの変容である、と捉えることができる。関係性の展開を「関係発達」、自己のありようの変容を「自己発達」とすると、両者はパラレルに展開する。このことを裏返せば、発達障害における関係性の障害は自己の障害であるとも言えるのである。こうした視座から関係論的な心理療法を捉えると、その技法の要点は、「ホールディングの態勢」「アクチュアリティに開かれた態度の志向」「情動調律の志向」「個別性とコンテクストの重視」の4点に集約される。すなわち、関係論的な心理療法とは、セラピストがクライアントをほどよくホールディングし、安心感をベースに情動調律を行い、コンテクストと個別性を尊重しながら、アクチュアルにかかわっていくアプローチである。あるいは、両者のあいだで柔軟に展開する間主観的領域において、互いの自己性と他者性がより感受できるように促すアプローチ、すなわち、クライアントの自己発達を促進する心理臨床的支援なのである。

第3章では、このような臨床的アクチュアリティに迫る研究方法として事例研究の意義が論じられる。そして、第4章では、知的障害と自閉症スペクトラムにおける自己発達と心理的支援についての先行研究を概観し、彼らを支援してゆくためには、関係性をもとに個別的な自己をアクチュアルに捉え、より包括的に自己という概念に光をあてる必要があることを浮かびあがらせる。この課題に応えようとするのが、以降の事例研究編である。

Ⅲ「事例研究編」の第3部では、自閉症スペクトラムの自己発達を参照枠にして、知的障害における「見えにくい」自己の障害が可視化される。第4部では、知的障害のある4つの臨床事例を検討し、発達障害における自己発達の特徴、および自己発達支援のあり方についての検討がなされている。

まず第3部第1章では、自閉症スペクトラムの特性が優位である成人事例の自伝をKJ法を用いて分析し、その事例の自己発達の様相を俯瞰した。その結果、対人交流のなかで自己を形成しようとする希求性がある一方、対人的自己の生成に困難さがあること、それゆえ、恒常的なモノへの一体化を通じて安心感を得、それを基盤として主体としての自己が形成されていく過程が示唆された。続く第2章では、相互的な対人関係のなかで、いかに自己が生成されてゆくのかを見るために、自閉症スペクトラムと重度知的障害を併せもつ子どもとその母親を対象とした、3年間の参与観察の記録が分析された。その結果、さまざまなエピソード記述の分析から、母子の関係性における自己の生成と再体制化がなされる様相が精緻に浮かび上がった。この事例研究は、対象児が児童期（小学4年生）であったころの研究1と、思春期（小学5年から6年生）のころの研究2から構成される。まず、研究1では、母子の同型的かかわりから相互主体的なやりとりが立ち上がり、共同的对象を獲得していく様相が描かれる。そして、研究2では同児のダイナミックな発達の變容を、母親が子どもの主張とみなしたことの意義が明示される。すなわち、母親がわが子を、能動性を備えた他者として、あるいは、意思あるものとして共感的に捉え、相互主体的な志向性に基づくやりとりを一貫して展開していく過程で、子どもの行動が収束し、自己の再体制化が支えられていったことが、慎重に考察されている。

第4部では、軽度から中等度の知的障害に自閉症スペクトラムや他の精神障害が併存する4事例について、自己発達支援の実際が検討されている。第1章は個人心理療法、第2章は母子

面接、第3章は集団心理療法、第4章は積極的に支援者連携が図られた事例である。各事例に著者がセラピストとして関わった期間はそれぞれ、12年間（第1章）、9年間（第2章）、1年間（第3章）、そして10年間（第4章）である。

第1章は、著者のイニシャルケースである。ここでは、関係論的心理療法において、セラピストに求められる基本姿勢が論じられる。クライアントは中等度知的障害をもつ30代女性で、苛酷な生育歴をもち、多彩な訴えを依存的に繰り返していた。この章では、クライアントが心理療法を通して、個としての自由を得、自律的に判断し始めるようになるプロセスがマイクロに検討されている。セラピストはクライアントの自己性を前提とし、彼女の情動反応を敏感に感知し、さらに、それによって引き起こされるセラピスト自身の情動反応に気づき、それを率直に表現していた。このようにセラピストが一貫して「アクチュアリティに開かれた態度」を志向し、常にクライアントにリアクションを返していくことによって、クライアントは安心感を抱き、自己感の手応えを得、それが自己生成のモデルとして機能したと考察される。

第2章では、中等度知的障害をもつ30代女性とその母親の事例が検討される。この母子の間では、分離困難という関係性障害が顕著だった。子どもが成人になって家族システムが激変した際、母子は相互に囚われ、膠着した関係性障害を呈し、子どもの情動の抑制が困難な状態となり、安定した情動的交流が困難な状態に陥った。入院を含めた長期の心理療法過程で、母子は相互の囚われを脱して母子分離に至ったが、そこにはセラピストである著者が、母子それぞれ、または母子共に、一貫して柔軟に「ホールディング」をしたことが大きく影響している。このかわりによって、母子間の情動的交流が促進され、母子各々において情動をオーガナイズする自己の発達につながり、分離が可能になっていったプロセスが詳細に記述され、考察されている。

第3章では、知的障害をもつ人々が非構成的集団心理療法に参加したときどのような体験プロセスをたどるかがKJ法を用いて検討された。分析の結果、【STEP 1. 基本的な自己存在感の確立】【STEP 2. 対人的自己の変容】【STEP 3. 適応的な対人的態度の獲得】【STEP 4. 生活場面への発展】という4つの階層的な個人プロセスが見いだされ、支援者の受けとめと理解が、この支援の要であることが示唆された。この章では、また、40代の一人の女性が本当の自分を表現していけるようになる過程が鮮やかに描写されている。

第4章では、飛び降りや、みずからの頭部や大腿部を包丁で刺すなどの激しい行動をくり返した重篤な強度行動障害を呈する20代男性の事例が描写されている。彼は、軽度知的障害と自閉症スペクトラムをもつと診断されていた。彼の強度行動障害の背景には、重い自己発達の障害と母子関係の行き詰まりがあった。入院当初、中島氏が個人心理療法を行うことで彼の状態は一応安定する。セラピストは母親面接も並行しておこなった。しかし退院に際して、子どもの自傷行為に対する母親の恐怖感は強く、個人心理療法を継続するだけでは家族の受けとめは困難であると判断されたため、セラピストは地域の他職種によびかけて支援者システムを構築した。それにより、事例の脆弱な自己をホールディングすることが可能となり、彼の行動障害は軽快し、家族の関係も改善していった。

IVの総合考察では、これまでの議論を踏まえてリサーチ・クエスチョン2「発達障害における自己発達とはどのようなものか」への答えが、知的障害と自閉症スペクトラムの対比を通し

て導きだされる。まず、自閉症スペクトラムにおける自己発達の特徴としては（１）同調的かかわりの重要性の気づかれやすさ、（２）相互的やりとりの立ち上げの困難、（３）自己完結的な自己理解一固く、まとまりにくい自己、（４）対人的自己生成の希求と困難—相互的やりとりを求めて／過刺激による侵襲、（５）自己否定感と二次障害、の５点が見出された。これを参照枠として、知的障害における自己発達の特徴として（１）同調的かかわりの重要性の見落とされやすさ、（２）表面的な相互的やりとりと過剰適応、（３）自他に対する「わからなさ」—あいまいな自己、（４）対人的自己生成の希求と困難—自己の受けとめと手応えを求めて／ニーズの気づかれにくさ、（５）自己否定感と二次障害、の５点が示された。いずれの発達障害においても互いの主体性を認め合う「相互主体的関係性」を構築する困難があると考えられたが、とくに、自閉症スペクトラム的な自己発達においては、「他者性を関係性において感じ取ることの困難」が、一方、知的障害的な自己発達においては、「自己性を関係性において感じ取ることの困難」が比較的強く見出された。

最後にリサーチ・クエスチョン３「発達障害における自己発達支援はどのように行うか」について、上記のような精緻な事例研究に基づいて、以下のような指摘がなされた。中島氏の実践からすると、どのような発達障害であっても関係論的な心理療法の一般的な方法論を適用することが基本的には可能であるが、より詳細には、以下の工夫が必要である。すなわち、セラピストがクライアントのわかりにくい自己表出を敏感に捉え、自己の内省も踏まえて、クライアントをホールディングしながら情緒的にフィードバックすると、クライアントも内省を深め、相互の主体の共通性と相違点がよりの確に認識されるようになり、やがて、そうした認識を踏まえてさらに適切な自己表出ができるようになる。著者は、この循環こそがクライアントの自己発達を促し、クライアントと周囲の人々との共生を可能にすると述べ、自己発達支援の道筋をモデル化し、Ⅴの「おわりに」に至る。

これまで知的障害をもつ人々に対する心理臨床的支援が、研究知見としてまとめられたものは極めて少なく、ましてや自己発達という視点から、彼らの症状や問題行動を捉え、その状態の改善のみならず彼らの変容をとりあげ、ここまで鮮明に説得力のある形で描き出したものは審査員らの知る限り皆無である。その理由はおそらくは、何よりも彼らの内的世界が外からはわかりにくいものだからであり、加えて社会の側の彼らに対する無関心さにもよるのだろう。しかるに著者はこの領域に踏み込み、自閉性スペクトラムという、知的障害と比べると見えやすく支援の対象となりやすい障害を参照枠としながら、知的障害をもつ人々の「見えにくい」自己の障害を可視化してゆくという手法を編み出す。あわせて、彼らの自己発達を支えてゆくための道筋を、関係論の立場からモデル化している。この点が本研究の最大の功績である。次に、知的障害の心理療法は特異的なものではなく、いくつかの工夫をすれば、一般的な心理療法の方法論を基本的には適用できると明らかにしたこと、および個人心理療法だけでなく、親子面接や集団療法、地域との連携など多面的なアプローチを用いて、彼らを支える多層的な支援の可能性を提示した点も大きく評価できる。加えて現在なお、わが国においてあいまいなまま乱用されている発達障害という概念を、おおもとの歴史からひもといて整理し、関係性という視点を絡めながら、発達障害が「自己＝主体」の発達の障害と位置づけたことの社会的意義

も高い。本研究で構築された知見は、知的障害をもつ人々に役立つ支援のみならず、それをこえた発展可能性を示すものであると考えられる。

とはいえ、今回中島氏によって提示された心理支援の各概念それ自体が、まだ、名称を含めてこなれておらず、より練られてゆくこと、および、今回見いだされた自己発達とその支援という視点を、彼らの日常生活になかにどのように沁み込ませ、定着させてゆくかという課題が今後に残されている。しかしこれらは、本論文の内容が今後さらに発展しうる大きな可能性を内包しているが故の指摘であり、本論文の価値を減じるものではない。以上のことから、本論文が博士（臨床心理学）の学位に値するきわめて優れたものであると、審査員全員一致で判断した。

論文審査主査	田中千穂子	教授
	滝川 一廣	教授
	倉光 修	特別非常勤講師